

## <前回>アジア・日本のキリスト教思想を問う

『近代日本とキリスト教思想の可能性——二つの地平の交わる場所』三恵社 2016年。

### 一 はじめに

### 二 先行研究の検討と視点の多様性

#### (一) 「アジアのキリスト教」の「の」をめぐって

...

「アジアのキリスト教」(そして「日本のキリスト教」)は、この問いを構成する「アジア」「の」「キリスト教」の三つの要素のいずれに関しても、今後さらなる方法論的な反省を必要としている。しかし、以上の先行研究の検討からも、これらの要素の「の」に関して、主格、属格、与格、対格、奪格の複数の視点が分析できることは、十分に確認できたであろう。先行研究においては、しばしば一つの視点が強調され、他の視点が否定的に扱われる傾向も見られるが、「アジアのキリスト教」の研究は、これらのすべての視点において可能であり、またそれらを必要とすると解すべきように思われる。ここでは、先行研究が基本的に次の見解を共有していることを確認しておきたい。

①明治期から第二次世界大戦にかけて、様々な仕方において試みられた「日本的キリスト教」のうちに見られるような、日本主義・民族主義への過剰な同化を避ける。

②「日本のキリスト教」には、単に地理的に日本に偶然位置するというだけでない積極的な意味が求められる。

しかし、多様な視点が顕わにされたとはいえ、これまでの先行研究において、「アジア」あるいは「日本」をめぐり分析は果たして十分だったであろうか。もちろん、『アジア』とは、最終的には地理的な概念にとどまらない、優れて歴史的な概念である。すなわち、『21世紀のアジアはこれまでに経過した二千年の歴史をどのように評価すべきか』という問いに対する答えこそが、彼らが言う『アジア』を定位するのである(同書、二一二)と言われるように、森本においても、アジアをめぐり、地理的、歴史的、言語的な内容が問われていた。また、「日本の神学はまず日本の歴史に関心をもつのである。とくにキリスト教と関わり合った日本の歴史に注目するのである」(古屋、一九八九、四〇)とあるように、アジアや日本の内実が問われてこなかったわけではない。大木との共著『日本の神学』における古屋の論考は、日本を正面から歴史的に論じた貴重な研究である。しかし、こうした貴重な研究の存在を認めつつも、「アジア」「日本」への反省は、必ずしも十分とは言えないように思われる。それは、森本が「文化の複合性」として指摘した問題を十分に視野に入れた議論が未成熟であると指摘する通りである。<sup>(8)</sup> あたかも、「日本」が自明の事柄として語られてこなかっただろうか。この点に関しては、次節でピエリスを扱う際に、論じることにし、ここでは、「アジアのキリスト教」がそこから分節化された諸要素と諸視点を包括した問題圏において成立しており、この問題圏に含まれた問題群に関わる研究は、すべて「アジアのキリスト教」研究と解し得ることを確認しておこう。<sup>(9)</sup>

#### (二) 土着化論

### 三 土着化論再考

### 四 「アジアのキリスト教」研究と地平モデル

...

問題は、こうした諸条件を満たしうる「アジアのキリスト教」研究のモデルをどのよう

に構築するかである。本節では、それを「アジアのキリスト教」研究の地平モデルとして提示し、その概要を説明することにした。

「アジアのキリスト教」研究における地平モデルは、「アジアのキリスト教」の解釈学的構造に注目した研究モデルである。ここでの解釈学とは、文献の解釈方法・解釈技術というよりは、むしろ、対象の存在様態（＝時間性・歴史性）の問いに関わっている。キリスト教思想研究におけるこうした議論は、ブルトマンとブルトマン学派における一連の研究に遡るものであり、ガダマーの解釈学的哲学の影響を受けている。<sup>(23)</sup> 議論の骨子は、事象の意味理解（理解するという作業）が、先行理解（先入見）を前提としていること、そしてこの先行理解は、事象の意味に関わる問いと答えを規定する「伝統」に帰属しつつ、歴史的・動的に展開してゆくということである。ガダマーは、この意味の理解を可能にする深層構造としての先行理解の「伝統」を「地平」（Horizont）と名付け、過去の地平との対話（事象についての問いと答え）によって新たにそのつどの「地平」が形成されるプロセスを「地平融合（Horizontverschmelzung）」と呼ぶ。

・・・

「地平モデル」は次の三つの要素によって構成される。

#### ①地平自体の歴史的発展（マクロレベルでの地平融合）

「地平」は歴史的過程の中で形成され、他の地平と融合することによって、新しい地平の生成へと展開していく。これは、過去と現在の歴史的地平の関係性として考えられたガダマーの地平融合概念を変形・拡張したものであるが、さらにあえて単純化するならば、「アジアのキリスト教」は、「アジア」と「キリスト教」という二つの地平の融合において形成されたものとして、図式的に理解することが可能であり、たとえば、「日本のキリスト教」は、日本の近代化（近世から近代へ）の歴史的連関の内部で、「日本」と「キリスト教」との地平融合の過程において、形成されたものと解することができるだろう。<sup>(25)</sup> したがって、「アジアのキリスト教」を研究する際には、それに先行する「キリスト教」と「アジア」双方の地平についての分析が要求されるのである。これまでの「アジアのキリスト教」研究における問題点の一つは、この「アジア」の地平への考察が不十分であったということにほかならない——そもそも「アジアとは」「日本とは」といった対象への反省が欠如している——。<sup>(26)</sup>

・・・

#### ②地平内部での諸動向の相互作用

#### ③地平（平面）と交差する垂直の次元

第三の要素は、地平と交差する垂直の次元である。地平が有する空間的イメージ、つまり、平面性は、それと交差するもう一つの次元を予想させる。この点については、本書では触れることはできないが、垂直の次元（高さあるいは深み）は、宗教思想で問題となる超越や永遠といった事柄を表現する際に重要になる。<sup>(27)</sup>

ここで、「地平モデル」の実例を挙げておきたい。ジェームズ・コーンは、黒人神学で知られる神学者であるが、『抑圧された者の神』（一九七五年）において、次のように述べている。

・・・

## 五 むすび

## 2. 日本キリスト教の歴史的概観

### (0) 「地平モデル」から「日本／キリスト教」へ

- ・「日本」という地平：宗教文化 → 東アジアの宗教文化圏：構造とプロセス  
儒教・漢字
- ・「キリスト教」という地平：近代の宣教の二つの波、近代化とキリスト教
- ・地平融合の二つの段階 → これが現在を規定する  
キリシタン時代、そして幕末・明治以降

### (1) 日本の宗教文化

#### 0. 「問い」としての世界的に特異な日本の宗教状況

- ・なぜキリスト教は土着化しないのか
- ・無宗教という日本人の自己意識

石井研士『データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版』新曜社、2010年  
NHK世論調査部『現代日本人意識構造 第三版』日本放送出版協会、1991年。  
(第八版、NHK ブックス、2015年。)

#### 1. 東アジアの宗教文化圏の共通構造：儒教文化圏、漢字文化圏

重層的な宗教多元性：基層／民衆宗教・民俗宗教／国家宗教・世界宗教  
遠近構造：身近なものを通して遠いものに関わりを持つ  
神仏習合のメカニズム

#### 2. 古代世界の緊密な相互交流＝形成プロセス → 統一文化圏の形成

学際的議論：人類学、考古学、歴史学、遺伝学、そして神話学  
記紀神話に組み込まれた神話の諸伝統

日本人の複合性 → 単一民族神話（小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社）

#### 3. 東アジアにおける宗教文化の相互交流の存在

世界神話の比較研究 → 日本神話の形成過程

王権神話の枠組みにおける様々な地域の神話の複合体  
日本人とは、日本とは、何か？

#### 4. 宗教文化の複合性

複合体としての儒教、神道

複合体のどの要素・側面をクローズアップするかで、議論は多様化する。そして議論にずれが生じる（噛み合わない議論）。

国家道徳哲学としての儒教（儒学）、家の祭祀としての儒教

#### 5. キリシタンの日本の宗教文化における意味

「キリシタンの歴史はザヴィエルが来日した一五四九年からわずか九〇年、一世紀にみたない短期間の歴史である。しかしながらそのキリシタンが日本におよぼした影響はまことにはかり知れないほど大きい。いうまでもなくその最大のものは鎖国であるが・・・」（古屋安雄／大木英夫『日本の神学』ヨルダン社、1989年、48-49）。

「キリシタンの時代には「葬式仏教」ならぬ「葬式キリスト教」として民衆の心をひろくとらえたのであった。」（49）

「檀家制度」「寛永年間（一六六一—一七三年）に宗門改め制度が整備されるに応じて全国的に成立したとされるが、キリシタンがなければ成立しなかった制度である。それゆえにキリシタンは中世以来の民衆や信仰形態まで変えてしまったとって過言でないであろう。」（49-50）

江戸幕府の宗教政策の基礎、近現代の日本人の宗教観を規定することになる。

身分社会（封建社会）の秩序の安定化に向けて宗教の民衆化を統制する政策  
そのためにキリシタン禁制が利用される。

宗門改めと寺請制度：仏教・寺を通じた民衆の管理

転びキリシタンは仏教に帰依したことの証文を要求される。

宗門改帳（宗旨人別帳）：領民の宗旨を登録した帳簿の作成

→ 近世的な「家」を掌握する役割、幕藩領主が把握すべき「小農」を土地に縛り付ける機能。

「家」制度を基礎にして葬儀を中心とした機能する支配のメカニズムに組み込まれた仏教、寺檀制度・檀家制度

民衆の宗教的エネルギーはその実現の場を失う → 宗教の習俗化・形式化

#### 6. 寺請制度＝日本型の政教分離

政治に組み込まれ、政治的な危険性を除去された宗教

公から分離され公を補完する宗教（政治を補完する宗教）

公／公共／私、国家／市民社会／家族

公共圏 親密圏

・戒壇、宗教者を宗教者として認めるシステム、  
律の伝わらなかった日本仏教

王権と教会との対立

↓

西欧的な政教分離への適合性

#### 7. 明治：国民国家形成という課題、二つのベクトル

A 「国民・民族→民族主義、統合の原理としての天皇制、神道国教化政策」

B 「国民・市民→近代主義、市民社会、自由民権運動」

↓

「明治憲法／教育勅語」（「明治憲法と教育勅語は一組のセットであって不可分離」  
（古屋、97））

↓

矛盾の解決としての「神道≠宗教」論

民族の魂としての天皇制と信教の自由の両立

↓

特異な宗教理解に基づく、無宗教という日本人の自己意識、

8. 「明治憲法が、西欧文明との同化を象徴したとすれば、教育勅語は、土着文化による西欧化の骨抜きとその権威を体現したのであって、文面上は西欧的立憲君主主義とそのもとの信仰の自由の保障は、それがわが国の宗教者の主張にこたえたものというよりは、為政者の対外的配慮から成立したという外来性のゆえに、ひよわなものに止まらざるを得

なかったのである。」「チェンバレンは、伊藤の『憲法義解』における信教の自由の解説をまったくの虚偽であり、意図的に内外の人びとを欺くものであると批判した。」(阿部美哉『政教分離——日本とアメリカにみる宗教の政治性』サイマル出版社、1989年)

## (2) 近代化の二つの波とキリスト教

### 9. 重層構造に対するキリスト教

- ・ 仏教的な仕方での日本化を行うのか (鈴木大拙の日本的靈性論に対応して)
- ・ 現代日本文化の中のキリスト教と教会文化のキリスト教

### 10. 天皇制に対するキリスト教

「国民・市民→近代主義、市民社会、自由民権運動」のラインで近代日本を肯定した明治のキリスト教は、BからAへの傾斜(明治後半から大正期)に批判的な対応ができなかった。

土肥昭夫『天皇とキリスト——近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』新教出版社、2012年。

菅孝行『天王星問題と日本精神史』御茶ノ水書房、2014年。

### 11. 井上章一「思想史と宗教史の、その裏側は——近代日本のキリスト教受容をめぐる」(『岩波講座 日本の思想 第六巻 秩序と規範』2013年)。

「日本では、キリスト教がうけいれられなかった。そう学術の世界で論じられるのは、研究者たちが信仰心にこだわってきたせいである。あるいは、内面のありかただけを、問いつづけてきたためでもあった。だが、われわれの目に見えるところでは、外形上のキリスト教化がすすんでいる。日本人の婚礼にまつわる風俗は、二〇世紀の後半以後、まちがいにそちらへむかっている。だが、内面の信仰にこだわる既成の学問は、この現象をとらえきることができない。うわつつらだけの変化だと、みなしてしまふ。」

「二〇世紀末ごろからであったろうか。僧侶の読経をうけつけない葬祭が、都市部では目に見えて、ふえだした。無宗教でとりおこなうという葬祭が、このごろ多くなりだしている。そして、無宗教と称される葬儀の形式は、大なり小なりキリスト教風である。献花のありかたなどをながめていると、そちらのほうに今日の趨勢を感じる。」(232)

「読者モデルをとりあげることで知られる『JJ』という雑誌は、一九七五年に創刊された。プロではなく、雑誌の読み手をモデルとして、紙面に登場させ、ページをこしらわれる。・・・モデルとなる女性のなかには、大学へかよう女子大生もおおぜいいる。・・・あえてのべそえよう。モデルを輩出する大学は、キリスト教系にかたよりやすくなる。」(233)

「かつて、江戸幕府は、キリスト教を淫祠邪教としてあつかった。明治大正期も、あやしい宗教としてのヤソ教像は、のこっていたらう。だが、今日のキリスト教は、まちがいに敬重されている。魅力的で美しくうつつたりするようにも、なってきた。この大変動が、信仰にこだわる宗教学の研究では、とらえられない。観念のありようから目をはなせない思想史の研究も、つかまえそこなっている。近代日本は、キリスト教をうけいれなかったと、あいかわらず言いつづけることになる。大学でくりひろげる学問には限界があると、そう言わざるをえない。」(235)

### 12. 文化としてのキリスト教はキリスト教自体にとっていかなる意味を有するのか。

### <参考文献>

1. 東アジアという問題設定について  
宮嶋博史・李成市他編『植民地近代の視座——朝鮮と日本』岩波書店、2004年。  
宮嶋博史「東アジアにおける近代化、植民地化をどう捉えるか」  
李 榮薫「民族史から文明史への転換のために」
2. 荒木美智雄「民俗宗教としての新宗教」國學院大學日本文化研究所編『近代化と宗教ブーム』同朋舎。
3. 吉田 司『宗教ニッポン狂騒曲』文藝春秋。
4. 鈴木大拙『日本的靈性』岩波文庫。
5. 網野善彦『「日本」とは何か』（『日本の歴史』00）講談社。
6. 大林太良『神話の系譜——日本神話の源流』講談社学術文庫。
7. 松本秀雄『日本人は何処から来たか——血液型遺伝子から解く』NHK ブックス。
8. 加地伸行『沈黙の宗教——儒教』筑摩書房。  
『儒教とは何か』岩波新書。
10. 東馬場郁生『きりしたん史再考——信仰受容の宗教学』天理大学おやさと研究所、グローバル新書6。
11. 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像 日本人のキリスト教理解と受容』吉川弘文館。